

初期横穴式石室について

土生田純之

- 1 横穴式石室の種類 九州系諸石室と畿内型石室など。
- 2 畿内型石室出現の歴史的意義 6世紀初頭における畿内型石室の出現は、それまでの死生観を一変する画期的な出来事であった。
新旧死生観の比較。
- 3 初期横穴式石室の特徴 畿内型石室の登場と、それが汎列島の規模に普及する以前の石室を初期横穴式石室と称する。これらは以後の石室と比した場合、形態上の差異から区別することが多い。確かに形態上から区別することは可能であるが、古墳と石室は連動しながら構築するものである。したがって、古墳構築過程のどの段階に石室築造を行うかについての考察は重要と思われる。
- 4 吉備の横穴式石室 吉備における横穴式石室の構築は、6世紀後半以後になって畿内型石室の系譜上にある石室が受容されて以後普及する。横穴式石室は系譜の淵源が朝鮮半島にあり、この事実は一見吉備が5世紀段階において朝鮮半島との交渉を欠いたかのように見えるかもしれない。しかし事実は逆で、大変密接な交渉があったことは明白である。墓制に限った場合、初期横穴式石室自体は欠くものの、これに代わる半島系の竪穴式石室がある。朝鮮半島にも様々な形態の墓制が存在するので、今後は朝鮮半島のどの地域との交渉か詳細に比較検討する必要がある。
千足古墳の横穴式石室は九州の肥後型石室であり、彼の地との密接な交流関係が想起される。また、畿内王権の意向とは関係ない独自の「外交」が行われていた事実を今に示してくれている第1級の考古資料である。

初期横穴式石室について

専修大学 土生田 純之

はじめに ほとんどの古墳は、たとえ墳丘の長さ 200m以上を誇る巨大古墳でなくとも人を埋葬するには大きすぎる規模を有しています。このため、実際に埋葬する部分は墳丘に比して規模は小さくなります。しかしそれでも前期古墳にみられる竪穴式石室の場合、長さ 10mにも達するものがあります。一方後期古墳に普遍的な横穴式石室ではさらに長く、28mを超えるものさえあります。いずれにしても規模から見て、石室は単に人を埋葬するだけのために存在するものではないことがわかります。

後述するように追葬を旨とする横穴式石室とは異なって、竪穴式石室の場合は単体埋葬が一般的ですから、ずいぶん広い空間が余ることになります。この部分がどのように使われたのかが問題となりますが、鏡を始めとする多くの副葬品を埋納するための空間であり、これら副葬品の配列法自体に解明のヒントがあると考えられます。例えば外部からの悪霊の進入を防ぐため、あるいはその反対に死霊が石室から抜け出して生者に取りつかないように封じ込めるための措置である、などとの説が提示されています。ですが、今回は横穴式石室の話ですので、竪穴式石室の話はまたいずれの機会にしたいと思います。

横穴式石室とは何か 竪穴式石室は四壁を石材で構築した後に天井石で覆う構造です。したがって出口はなく、封土に坑を穿った後に天井石を除去しなければ内部に侵入することが出来ないため、基本的には単体埋葬とならざるを得ない構造です。これに対して横穴式石室は、一方の小口が外部に開いており閉塞のための石材（閉塞石）を除去すれば何体でも追加埋葬（追葬）することが可能な構造となっています。この閉塞石は石室を構築して初葬を行った後に外部に開けられた開口部に石材を積んだ（1枚の板石の場合もある）ものですから、基本的な構造上は石室と何ら関係のないものです。

ところで横穴式石室には多くの種類がありますが、以下では代表的な石室の概要を述べておきます。

竪穴系横口式石室 竪穴式石室の構造を母体として、一方の小口に横口を設けた石室。明確な羨道や前壁をもたないことが特徴で、横口部で段差を生じて石室内に降下するものも多い。4世紀末頃の佐賀県唐津市谷口古墳などを初現として、6世紀前半まで築造された。

北部九州型石室 4世紀末の福岡市鋤崎古墳を初現として、6世紀前半頃まで築造された。竪穴系横口式石室が谷口古墳など初現期の石室を除き、主として小規模墳の内部主体であったのに対し、首長墓に採用された。石室は玄室平面が矩形で壁面は扁平な石材で持ち送りを強く用い、短い羨道が主として両袖形（羨道と玄室の接続部で両側に広がって玄室が幅広になるものを両袖形、どちらか一方のみが広がる形態を片袖形、全く広がらないものを無袖形と呼称する）に接続する。閉塞は板石を用いる。また玄室の隅角は上部に至るまで保たれていることが多い。当初のものは前庭部、羨道、玄室等の境界に段差を生じて徐々に降下する。この点では竪穴系横口式石室同様、伝統的な竪穴式石室の構造から完全に払拭できていないことが考えられる。

肥後型石室 肥後に特有の石室で、他地域にはほとんど分布していない。5世紀初頭に出現し6世紀中葉まで存続。最大の特徴は、玄室平面が方形で穹窿状天井を持つことにある。

一方、玄室内には*¹石障や*²屍床仕切石を配してコ字形を呈する3屍床と中央の通路に仕切る定形的な形態も初期の段階から認められる。

横口式家形石棺 筑後を中心とする有明海沿岸の首長墓に採用された墓制。家形石棺の小口に横口を設けた妻入の横口式で、これをわずかに覆う鞘堂のような横穴式石室が石棺配置の後に構築されることも多い。築造時期は5世紀前半から6世紀前半に限られている。

畿内型石室 6世紀初頭に畿内で成立。当初は首長墓に採用され、周辺地方においても首長墓などの独立墳に採用された。以下のような特徴を共有する。①玄室平面が矩形で、天井縦断面は平天井で前壁を有する。②玄門部では立柱石は立てても壁体の中に組み込まれて内側にせり出すことはない。③*³鴨居石（楣石）を置かず、両袖形または片袖形に羨道が接続する。④九州系石室のように閉塞石に板石を使用することはいわゆる終末期の古墳を除いて原則的になく塊石を積み上げる。⑤当初から羨道が極端に狭いものはなく、ある程度の広さをもった通路としての機能を備えたものである。⑥石材は大型化の指向が強いが、*⁴腰石の使用はない。⑦玄室の隅角は上部に至るまでよく保たれている。

岩橋型石室 紀ノ川流域の岩橋千塚を中心とする限られた地域に分布する。5世紀末頃に成立した。最大の特徴は、玄室と羨道の間には玄室前道と呼ばれる狭い通路を持つことにある。片岩系の扁平な石材を小口積するが、玄室の天井は高いにもかかわらず玄室奥壁や前壁と側壁が合致する隅角部では両壁に跨るような石材はないので、隅角は非常によく保たれている。*⁵石棚や*⁶石梁を多用する点が際立った特徴である。

*¹石障 玄室の四周に板状石材を配置して遺骸安置の場所を囲む施設。副葬品配置の空間をも囲むので、玄室全体を囲むことになる。

*²屍床仕切石 遺骸安置の場を直接囲む施設。石障が遺骸安置と周囲を囲むのに対し、石棺に対比できるようなごく狭い遺骸のみ安置するほどの広さにとどまる。石障内を奥壁側と左右の側壁側に計3か所コ字形に配置し中央を通路とする形態が肥後型石室の定型と考えられる。

*³鴨居石 羨道と玄室の接続部（玄門部）の天井石が、羨道と玄室の天井石よりも下方に突出したもの。他の天井石に比して幅狭のことが多い。楣石と称することもある。

*⁴腰石 石室を構成する石材のうち最下段の石が他に比して著しく大型のものである場合に腰石と呼ぶ。九州系石室に多くあり、畿内型石室には認められない。

*⁵石棚 奥壁側から扁平な石材を突出させたもの。左右両壁にまたがる長大なもの他、奥壁の一部に食い込む小規模なものもある。

*⁶石梁 玄室の両側壁間にわたされた石室補強用石材。紀ノ川流域のみに分布する。

初期横穴式石室 既述のように横穴式石室にはさまざまな型式がありますが、中でも畿内型石室が最も重要です。というのは4世紀末や5世紀初頭ときわめて早い段階から構築された九州系諸石室ですが、実は九州以外の地方にはほとんど伝播・受容されなかったからです。汎列島の横穴式石室が広がり葬送儀礼の在り方や死生観にまで大きな変革をもたらしたのは6世紀初頭の畿内型石室の登場を待たなければなりません。その意味で千足古墳が5世紀前半という非常に早い時期に肥後型石室を受容している事実は大いに注目されます。この点については後述しますが、中・北部九州の場合5世紀後半にはすでに横穴式石室が普及しておりもっとも一般的な墓制となっていたのに対し、他地方ではいまだ特殊な墓制にとどまっており極めて少数が認められるだけです。

このような九州と他地方に見られる時期的乖離について、その要因を解明することは容易なことではありませんが、以下にその見通しを述べておきましょう。

さて、横穴式石室は既述のように横口が開いており閉塞石を除去すれば追葬が可能な埋葬施設です。事実多くの石室では何体もの遺骸が確認されており、なかには10体を超える例も珍しくありません。また石室内を死者の住む世界（黄泉国）、あるいはそこに至る通路と考えていたようです。そのことは装飾古墳の壁画などから窺うことができますし、『記紀』神話にもそうした思想に裏付けられた説話（イザナキの逃走神話）が掲載されています。死者は現世と絶縁するための特別な食事＝ヨモツヘグイをするため、また黄泉国に赴く糧としても食事が用意されていなければならないのですが、前半期古墳＝竪穴式石室にはこうした風習が見られません。どうやらこの時代は死後の霊魂は大空に飛翔する存在と考えられていたようです（『記紀』に見られるヤマトタケル伝承は、そうした思想に基づいた説話が掲載されています）。ところが九州系石室の場合は本来横穴式石室に伴うヨモツヘグイが実施された痕跡が認められないのです。ここに墓制との乖離が認められます。こうした状態に決着をつけたのが畿内型石室の登場です。この場合は出現当初から上記風習の定着が認められます。最も当初は首長墓のみに採用されており、より広範囲に広がるのは6世紀中葉を待たねばならなかったのですが、いずれにしても畿内型石室は横穴式石室とこれに本来伴う死後の世界観が一致した初めての墓制といえます。しかも畿内王権の強大化という時代背景もあって6世紀中葉以後汎列島的に横穴式石室の墓制が広がっていくのです。したがって6世紀初頭の畿内型石室の登場こそが古墳時代の墓制を根本から変革する重要な出来事であったと評価できるのです。こうして、新しい死生観が普及する以前の石室、つまり5世紀代の横穴式石室を初期横穴式石室と呼んでいるのです。最も中・北部九州地方に限っては5世紀後半にはすでに横穴式石室が普及しており、希少感が伴う初期石室という名称には大いに違和感があることは否めませんが。

初期横穴式石室の特徴 以下では形態とは直接の関係がない構築法に絞って考えてみます。形態等については上述の説明を参照してください。

さて、ここでは石室の基盤面を中心に考察します。基盤面とは石室が構築される基礎面のことですが、前代に盛んであった竪穴式石室の場合、墳丘の構築が終了した後やある程度整った段階からつまり墳丘築盛の途中から墳丘構築とともに石室を築造していきます。前者を掘り込み墓坑、後者を構築墓坑と言いますが、いずれにしても基盤面が盛土による墳丘の中にあることに相違ありません。ところが横穴式石室の場合、天井石をはじめそれまでの竪穴式石室とは比較にならない重量があります。このため盛土では重量を支える強度が不足しており崩壊した石室も多く発見されています。特に規模が大きい畿内型石室の場合、当初の古墳は大阪府高槻市今城塚古墳のように崩壊を防ぐことができなかったようです。そこで、後述するように構築技術の改善が図られるようになります。しかし、畿内型石室の初現期はもちろんのこと、それ以前に築造された九州系石室はいずれも前代的な構築法を踏襲しているのです。したがって、石室の大半を地中深く掘りこんだ墓坑内に構築するのですが、竪穴式石室とは異なり横口を設ける必要があることから入り口に至るためには斜めに降下する構造とならざるを得ないことになるのです。横穴式石室は追葬が可能な構造であり実際に追葬した例が一般的です。その際、追葬時に最も便利な構造は、当然入り口から石室内に侵入する時床面に段差がなく水平な構造でしょう。特に重い石棺を

運ぶような場合は、切実な問題であったと考えられます。したがって横穴式石室の構築が普遍的になると、外部（前庭部）と石室内部の床面とが同一レベルになるように構築されるのです。このためには開口部を墳頂部に設けるのではなく、墳丘側面に配置するような構造となるのです。ところで、旧地表面が軟弱な場合は前庭部を含む横穴式石室の基盤面を硬い層に達するまで掘り下げたうえで石室を構築する、あるいは一旦掘り下げた墓坑に薄く盛った層を叩き締めてさらに薄い層にし、これを何度も重ねて地盤改良をした上に石室を構築するなどの工夫を凝らすことが多くなるのです。もちろん、その過程では様々な儀礼が執り行われています。

しかし、初期石室の場合はいまだこのような工夫が見られず、また前代の名残からか石室の入り口が墳丘上など高い位置に設けられており、このため石室内への侵入は斜め下に降下する構造となっているのです。以上のような構造は、前半期古墳における最後の儀礼が弥生時代以来の墳頂部での儀礼を少なくとも形の上では踏襲していること。一方、定着した段階における横穴式石室の場合は、前庭部での儀礼が普遍的となり、これに相応しい位置、すなわち墳丘の側面に開口し、大型古墳の場合は基壇のテラスと呼ばれる平坦面に儀礼を実施する場でもある前庭部を配置するようになるのです。

吉備の横穴式石室 吉備の横穴式石室は、多くの他地方同様 6 世紀後半になって畿内型石室の系統上にある石室構築がようやく盛んになります。横穴式石室は基本的に朝鮮半島からの伝来によります。そうであれば、当該地は 5 世紀代朝鮮半島との交流は盛んではなかったのでしょうか。もちろんそんなことはありません。むしろ、他地方に比して彼の地との交流は盛んであったといえます。しかし、そもそも朝鮮半島にも多くの国や地域があり、各々が固有の文化を持っておりました。墓制についても同様で、すべてが横穴式石室を取り入れていたわけではありません。たとえば 4 世紀の早い段階から横穴式石室を構築していた百済に対し、新羅では相当に遅い段階でこれを受け入れています。

ところで吉備（特に備前・備中）の場合、千足古墳を除くと 6 世紀前半に降下する総社市三輪山 6 号墳（竪穴系横口式石室の系譜にある石室）が構築時期の早い例であり、普及するのは 6 世紀後半に下るようです（玄室羨道の接続部—玄門部—における天井構造など若干の相違はありますが、畿内型石室が定着します）。しかし横穴式石室が普及するまで、特に 5 世紀段階にも朝鮮半島との交流は盛んで、墓制からもそのことが窺えます。

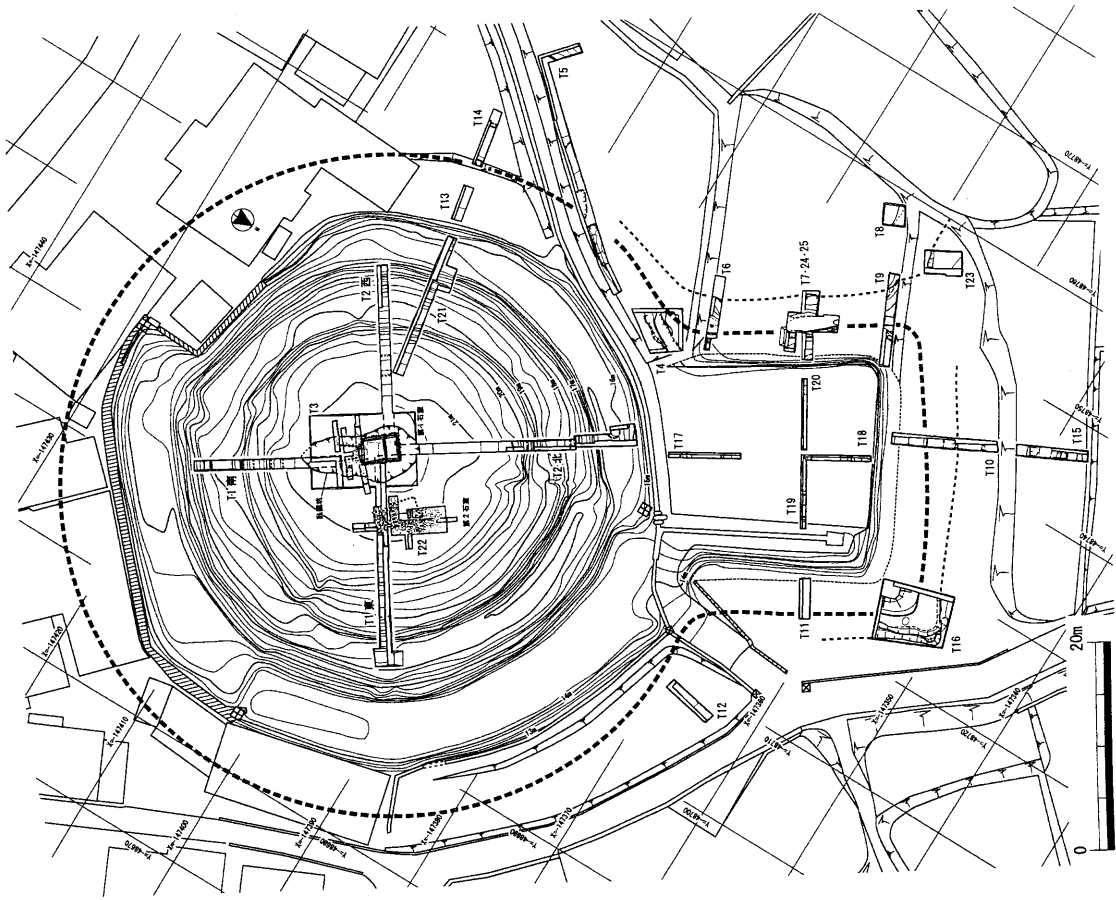
さて、総社市随庵古墳や兵庫県姫路市宮山古墳をはじめ吉備から播磨にかけての地方では、比較的幅広で長さが前代のものに比して短くしかも各壁が直立気味に立ち上がる、いわゆる箱形の竪穴式石室が注目されています。これは大伽耶など洛東江中流域に特徴的な石室構造であり、副葬品にも半島系文物が多く確認されているのです。こうしたことから吉備は朝鮮半島との交流が少なかった、あるいはなかったのではなく、吉備地方が交流を行った半島側の地域では横穴式石室の構築が盛んではなかったものと考えられるのです。

さて、6 世紀後半になって畿内型石室を採用する意味についてはその前史に遡って考察する必要があります。そもそも吉備では 5 世紀前半に全長 360m という巨大古墳—岡山市造山古墳が築造されます。同時期の「畿内」では最大規模墳が約 360m の大阪府堺市「履中陵」ですので、基本的には吉備と「畿内」の実力差はさほどなかったものとみられます。その後も総社市作山古墳（280m）、そして赤磐市両宮山古墳（210m）と巨大古墳の築造は続きますが、一貫して規模の縮小化が進行していることに留意したいと思います。また

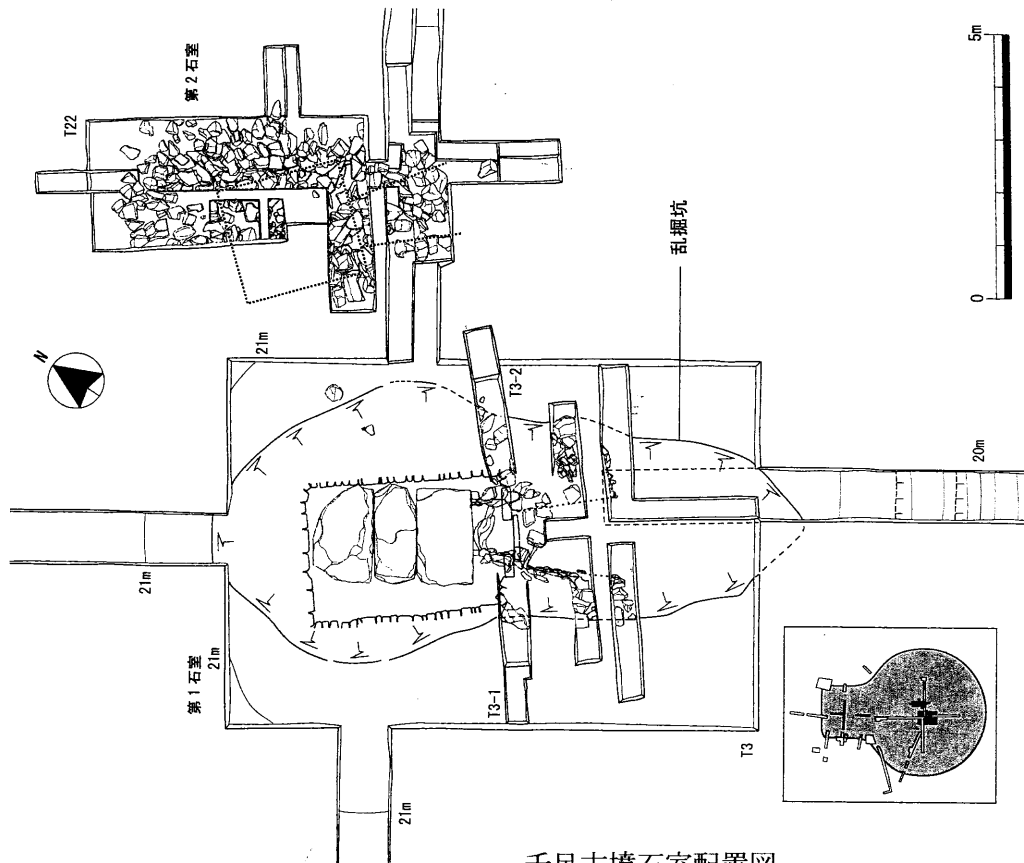
同時期の「畿内」と比較すると、その格差が徐々に進行していること否めない事実です。特に5世紀後半の両宮山古墳以後、巨大古墳の築造は途絶え6世紀後半の総社市こうもり塚古墳（100m）まで大型古墳の築造が見られなくなります。当該期は欽明朝であり、こうもり塚古墳の墳丘は欽明天皇陵と目される五条野丸山古墳と同様の形態を示すことや、石室が畿内型石室であることなどを評価する必要があります。当該期は吉備に児島屯倉や白猪屯倉が設置されており、こうもり塚古墳の築造はこうした展開と密接に関係するものであると思われます。おそらく上記屯倉の管理者としての復権であったと思われるのです。

以上のように見るとき、千足古墳はどのように位置づけることができるのでしょうか。千足古墳の石室は肥後型石室の範疇に属するものであり、しかも石室構築に用いられた石材のうち砂岩は熊本県天草地方のものに比定されています。このことから両地域の密接な交流の実態が想定されます。言うまでもありませんが、千足古墳は造山古墳の前方部外側に立地し、陪塚的な位置にあります。実際に造山古墳を主墳とする陪塚か否かは、両者を結ぶ道路の存在等有機的な関係を示す遺構の存在が未発見のために確実なことは言えませんが、密接な関係にあることに相違ありません。こうしたことから、千足古墳の存在は「畿内」王権の意思とは直接関係なく、独自の「外交」を行っていた吉備の実力を如実に示すものとして大いに注目されるのです。つまり、千足古墳は5世紀における「吉備政権」の実力と性格を今に示す、歴史の生き証人ともいえる重要な資料であり、間違いなく第1級の歴史資料なのです。

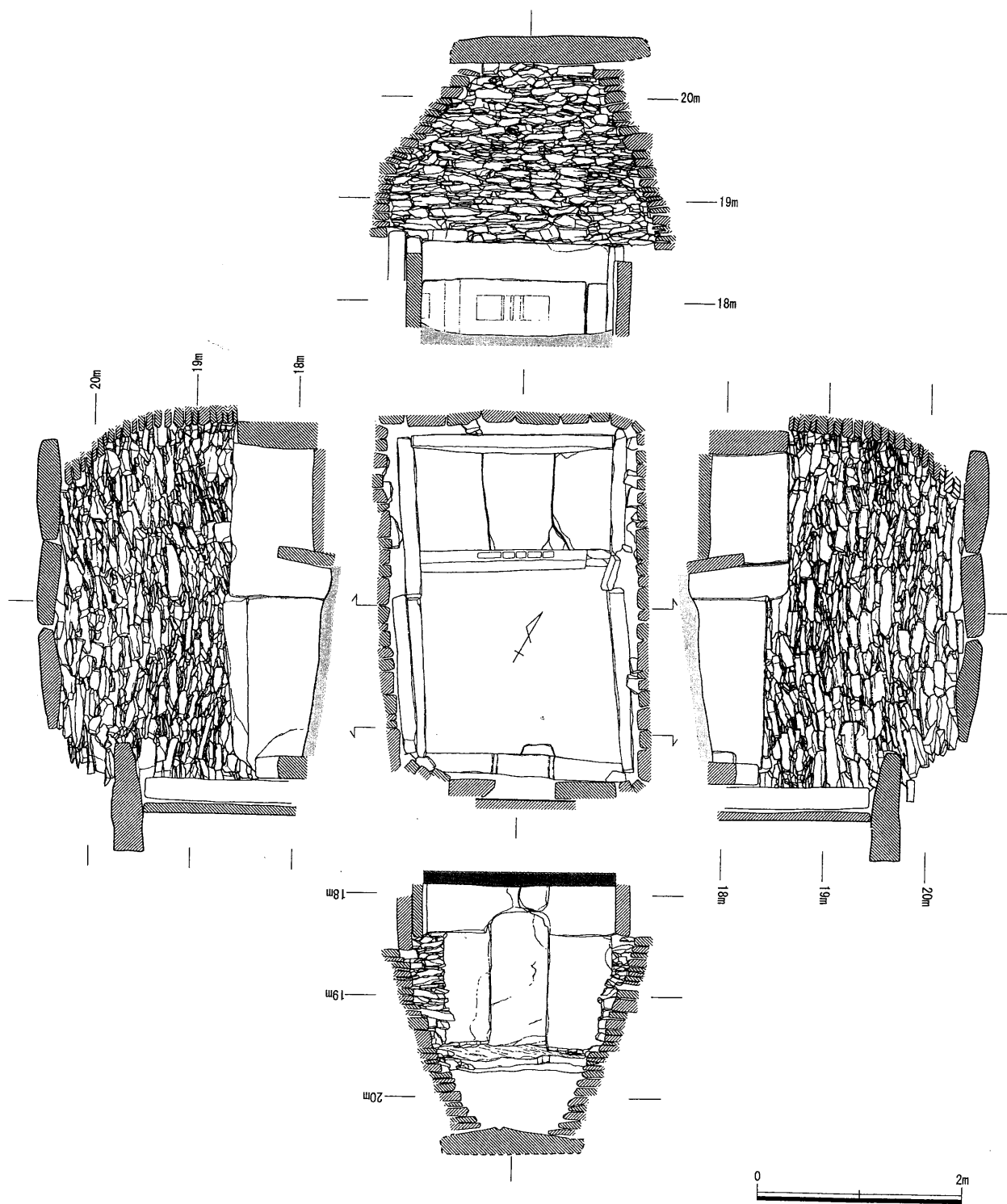
なお、千足古墳の横穴式石室が古墳主軸に沿って墳頂部に2基並列していることは、古墳築造の当初から2基の石室構築が計画されていたことを示すものであり、4世紀末の築造にかかる佐賀県唐津市谷口古墳と同様の在り方を示しているものとみられます。つまり、いまだ石室内への追葬を前提とした葬制ではなく、実態としては前代的な葬制にとどまっていることを示すものとも思われます。また石室基盤面が盛土上に位置することや、石室開口部が前方部側とは逆方向の、しかも墳頂部に開けられていることなど、多くの特徴はいまだ追葬を旨とする本来の横穴式石室の示す墓制や構造に合致した儀礼を実施するためには相応しい構造でないことを示すものであると断言できます。したがって、このような極めて早い段階での横穴式石室の採用は、在地における死生観の変革を惹起させるには、いまだ条件が整わない、あまりにも早すぎた登場であると言わざるを得ないものであったのです。



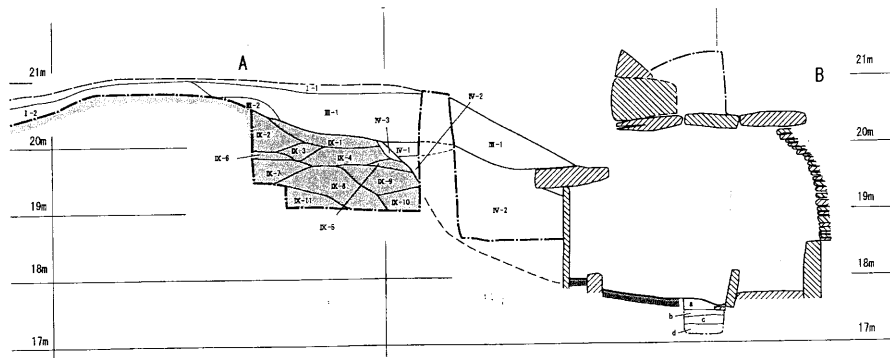
千足古墳の墳丘



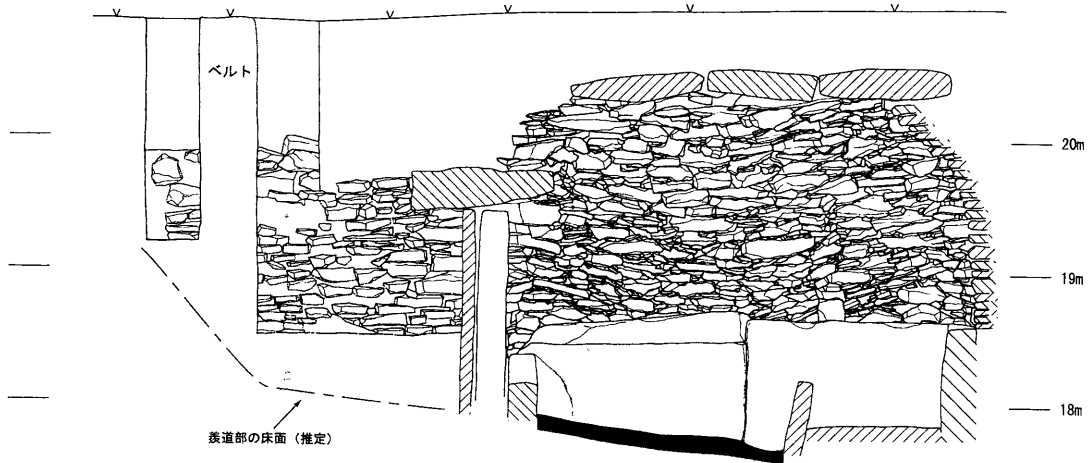
千足古墳石室配置図



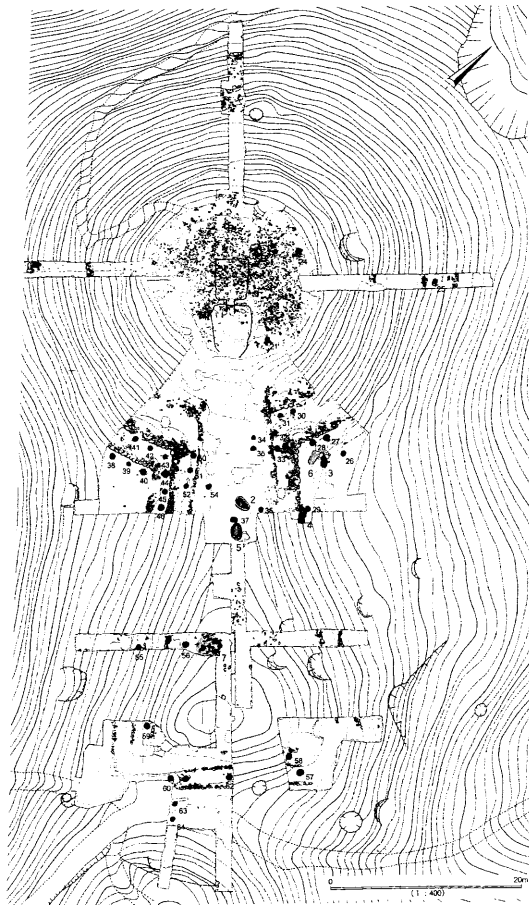
千足古墳第1石室図



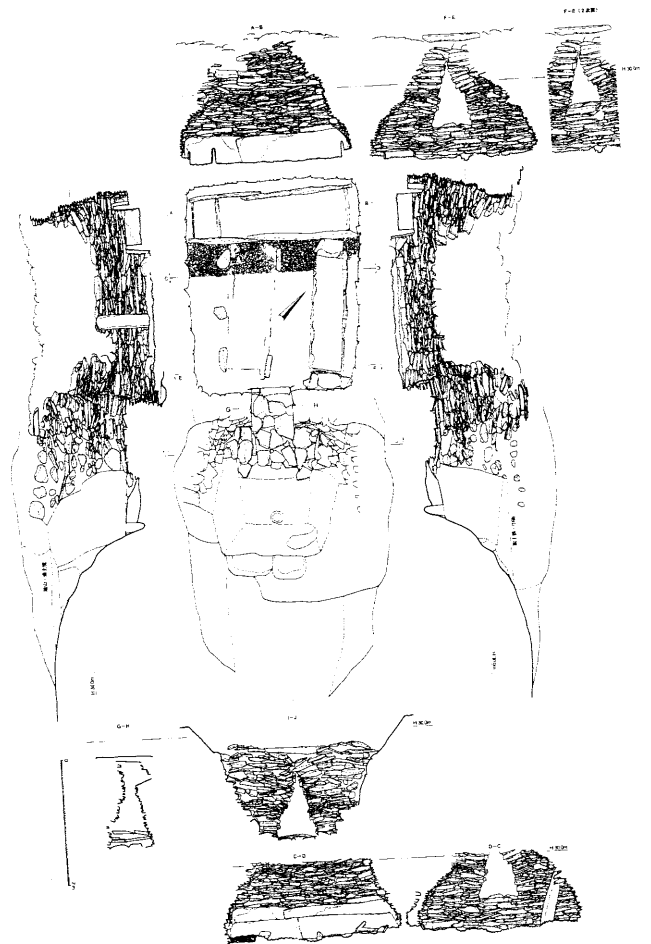
千足古墳石室・玄室～羨道～墳頂部見通し図



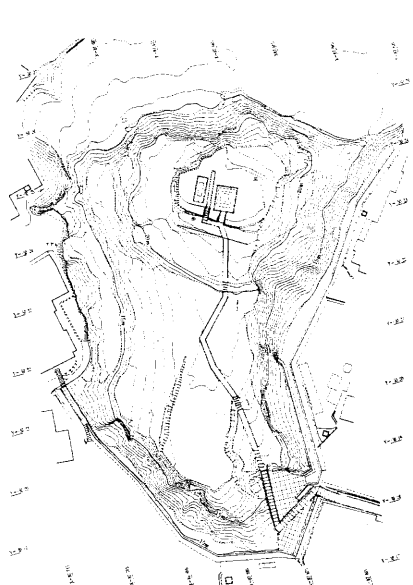
千足古墳石室・玄室～羨道見通し図



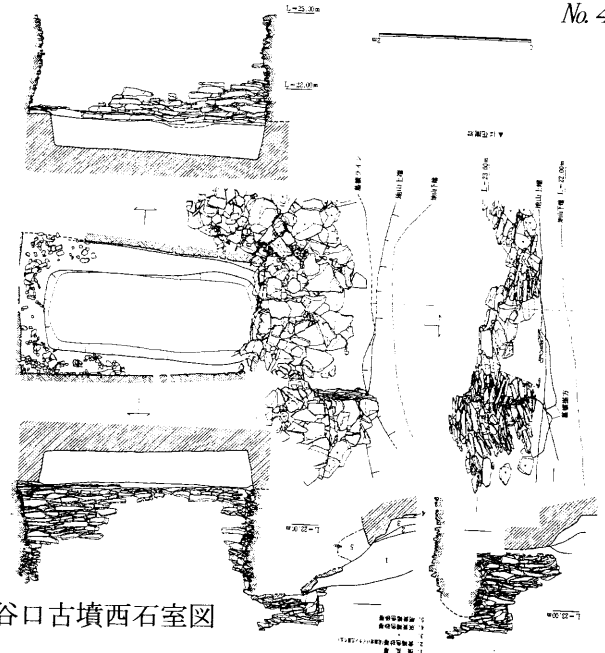
福岡市鋤崎古墳の墳丘



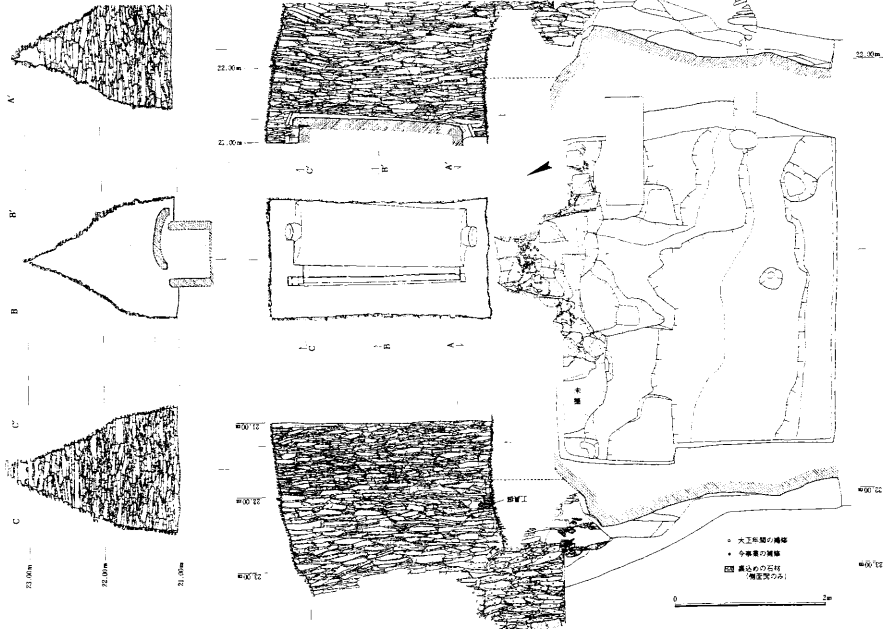
鋤崎古墳石室図



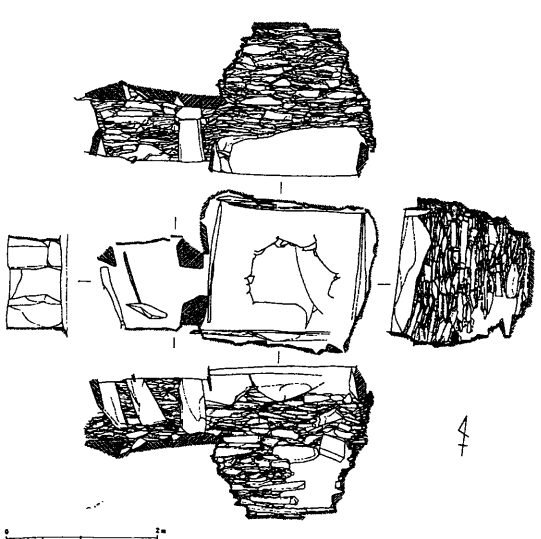
佐賀県唐津市谷口古墳の墳丘



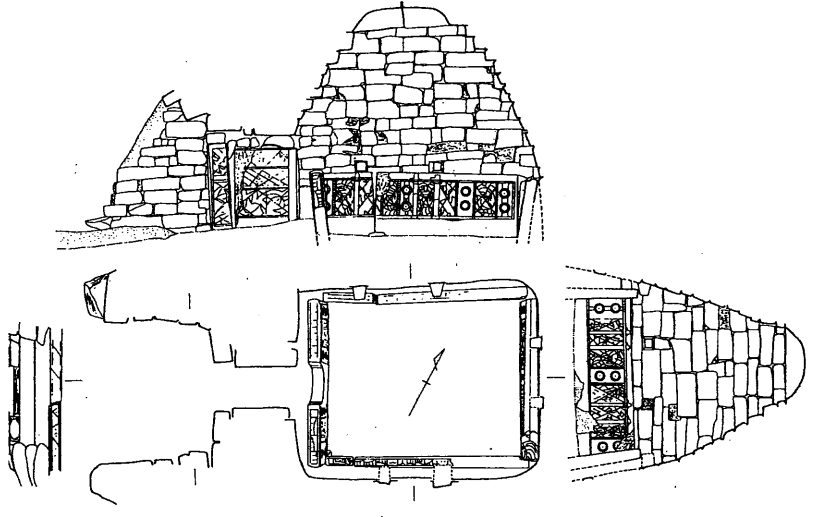
谷口古墳西石室図



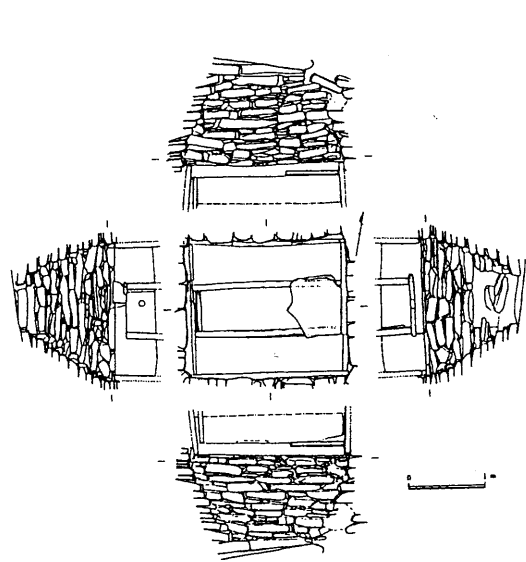
谷口古墳東石室図



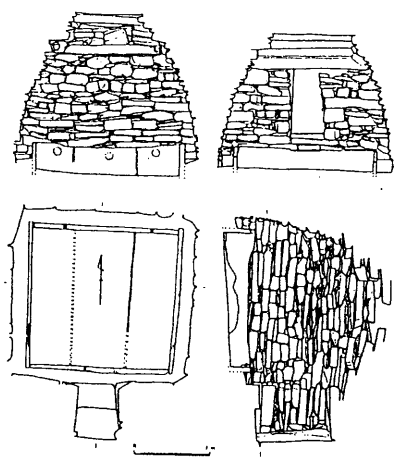
熊本県玉名市伝左山古墳石室図



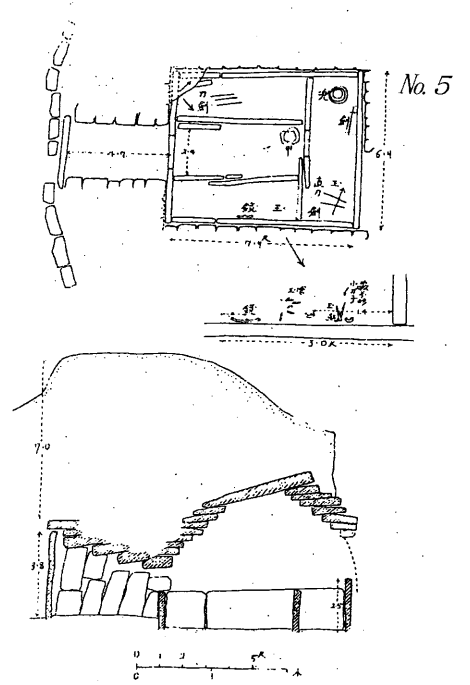
熊本県嘉島町井寺古墳石室図



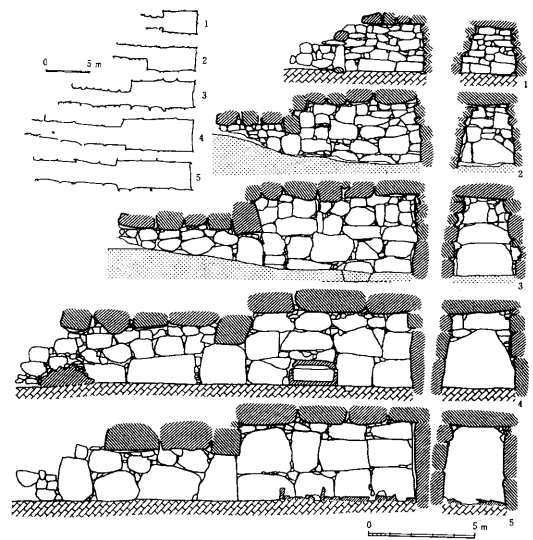
熊本県八代市小鼠蔵 1号墳石室図



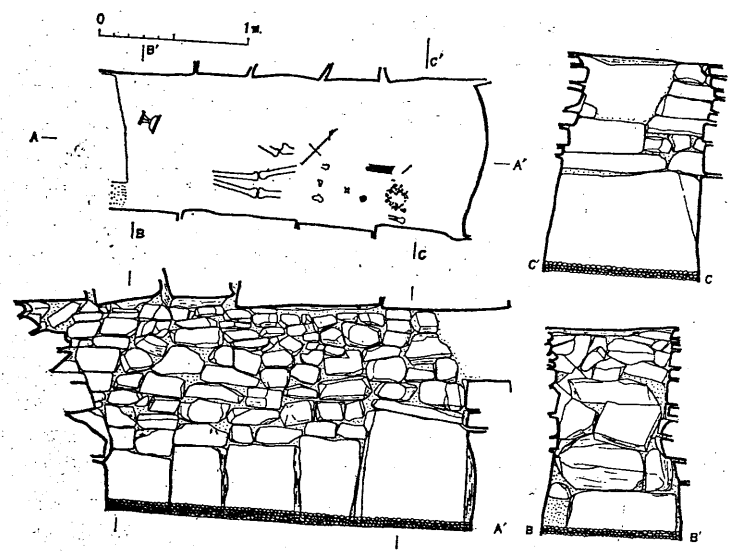
熊本県八代市尾張宮古墳石室図



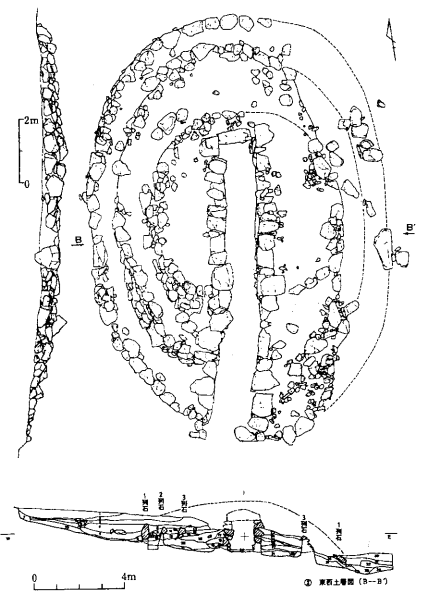
熊本県御船町小坂大塚古墳石室図
1R = 3.03m



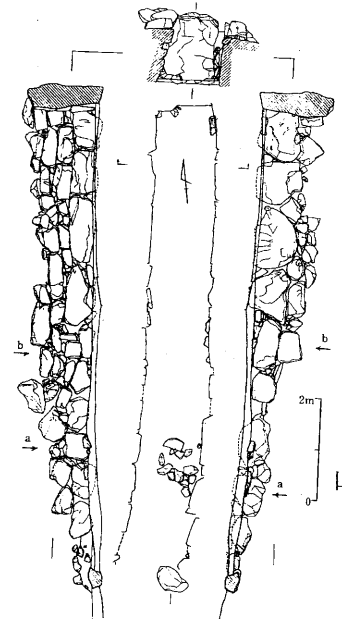
岡山県における横穴式石室の変遷



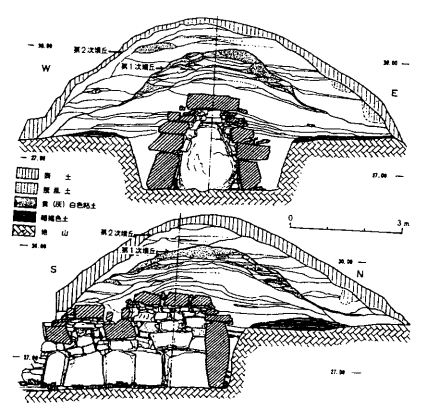
総社市三輪山 6号墳石室図



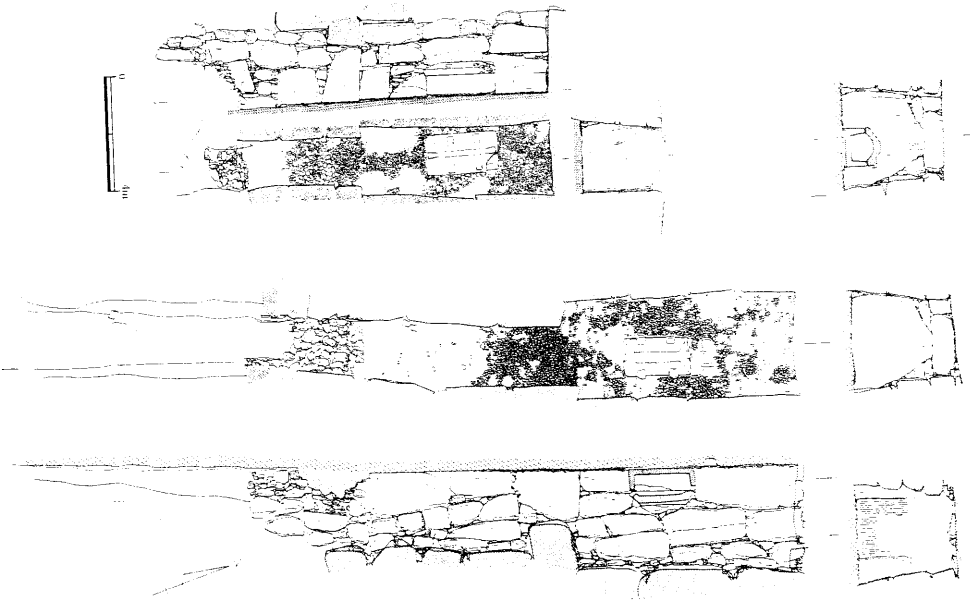
箕谷 3号墳の石室と墳丘断面



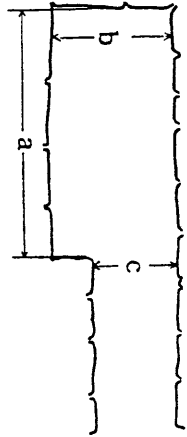
兵庫県養父市箕谷 3号墳石室図



山口県下関市岩谷古墳の石室と墳丘断面



右) 江崎古墳 (左) 石室図



畿内における横穴式石室編年図

第2期 河内・芝山 大和・椿井宮山 第3期 摂津・勝福寺 大和・吐田平2号
 第4期 摂津・海北塚 大和・二塚前方部 第5期 河内・金山 河内・大塚
 第6期 大和・岩屋山 大和・柳墓 第7期 河内・三子塚 摂津・阿武山

2期		河内・金山
3期		大和・吐田平2号
4期		大和・柳墓
5期		河内・大塚
6期		大和・柳墓
7期		大和・柳墓

横穴式石室の女室幅指数

向袖式			片袖式		
型式	古墳名	指数	型式	古墳名	指数
I	和泉・塔塚古墳	92	I	大和・椿井宮山古墳	75
	河内・芝山古墳	72		大和・桜井公園2号墳	69
II			II	大和・吐田平2号墳	63
III	河内・金山古墳	57	III	摂津・塚原所在古墳	63
	大和・天目山古墳	(51)		摂津・勝福寺古墳	52
	大和・二塚古墳(後円部)	(46)		摂津・南塚古墳	(48)
IV	大和・柳墓古墳	(62)	III	摂津・海北塚古墳	51
	大和・岩屋山古墳	57		大和・二塚古墳(前方部)	45
V	大和・石舞台古墳	56	IV	河内・大塚古墳	45
	河内・三子塚古墳	33			

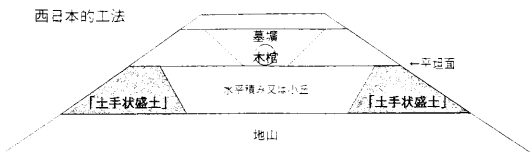
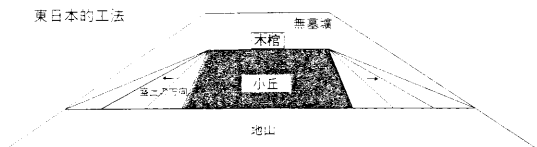
横穴式石室の羨道幅指数

向袖式			片袖式		
型式	古墳名	指数	型式	古墳名	指数
I	和泉・塔塚古墳	41	I	大和・椿井宮山古墳	35
	河内・芝山古墳	33		大和・桜井公園2号墳	50
II			II	大和・南塚古墳	(42)
III	大和・天王山古墳	61	III	摂津・吐田平2号墳	60
	大和・二塚古墳(後円部)	63		摂津・勝福寺古墳	61
	河内・金山古墳	69		摂津・塚原古墳	64
IV	大和・岩屋山古墳	70	III	摂津・海北塚古墳	67
	大和・石舞台古墳	71		大和・二塚古墳(前方部)	68
	大和・柳墓古墳	76		河内・大塚古墳	81
V	大和・西宮古墳	78	IV		
V	河内・三子塚古墳	86	V		

$$\frac{b}{a} \times 100 = \text{女室幅指数}$$

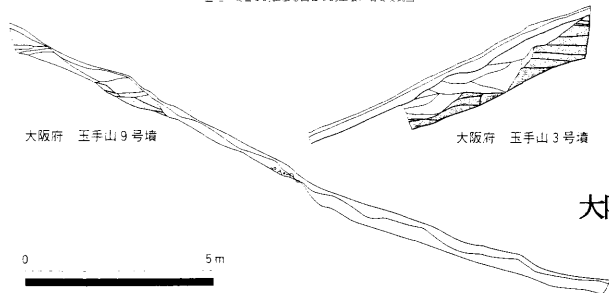
$$\frac{c}{b} \times 100 = \text{羨道幅指数}$$

女室幅・羨道幅の指数化



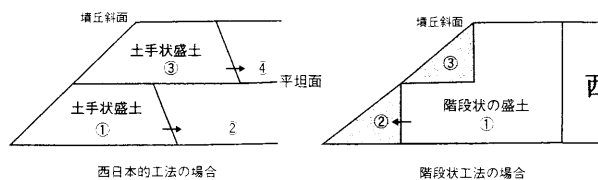
東日本的工法と西日本的工法の構築模式図

図2 東日本的工法と西日本的工法の構築模式図

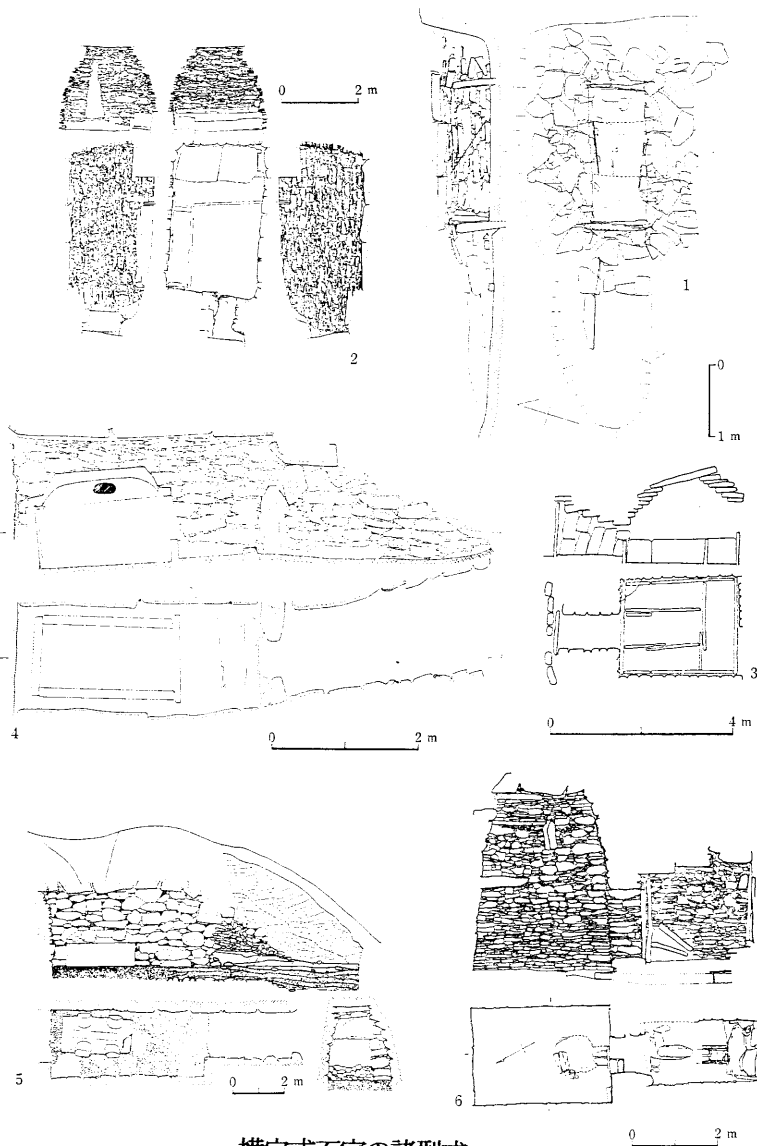


大阪府玉手山古墳群における階段状工法の事例

図3 大阪府玉手山古墳群における階段状工法の事例



西日本的工法と階段状工法における法面決定の差



1 竪穴系横口式石室・福岡県名木野古墳

2 北部九州型石室・佐賀県横田下古墳

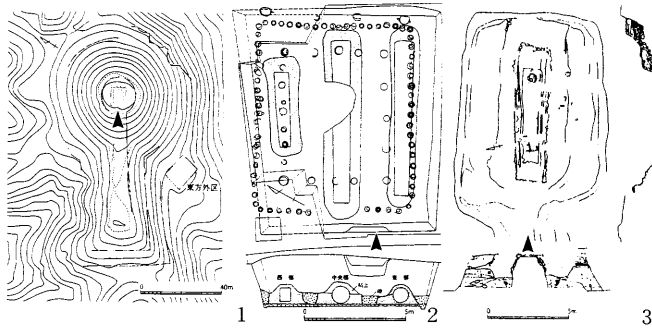
3 肥後型石室・熊本県小坂大塚古墳

4 横口式家型石棺・佐賀県西隈古墳

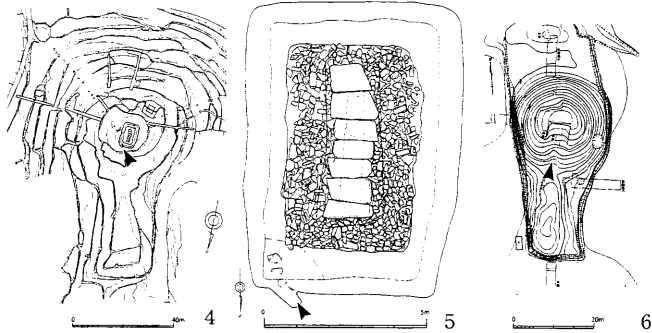
5 畿内型石室・奈良県市尾墓山古墳

6 岩橋型石室・和歌山県將軍塚後円部石室

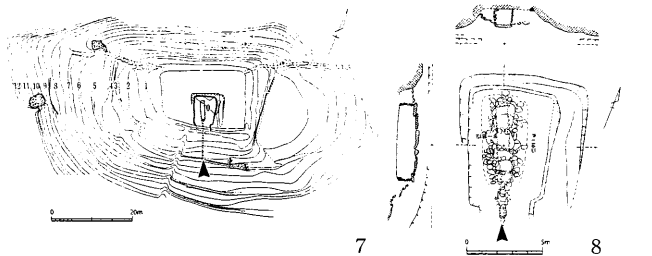
横穴式石室の諸型式



1・2 三重県石山古墳 3 静岡県新豊院山D2号墳

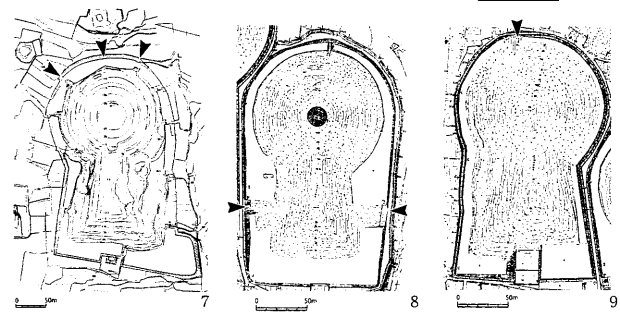
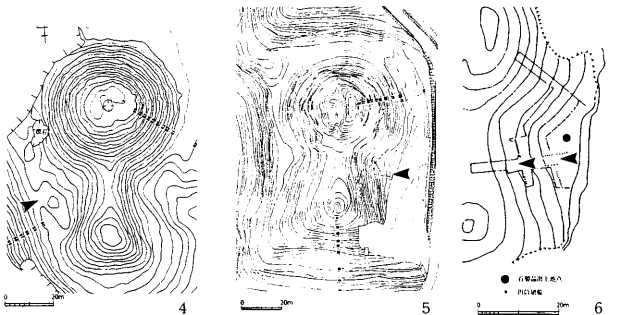
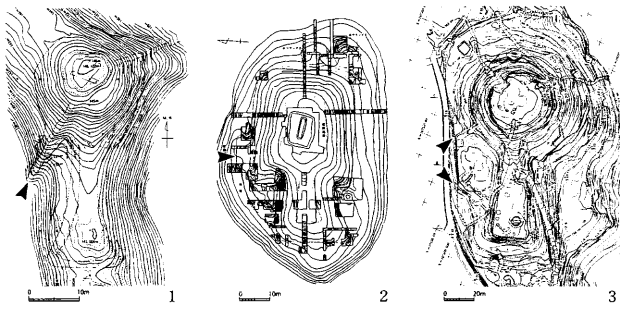


4・5 熊本県向野田古墳 6 山口県若宮古墳

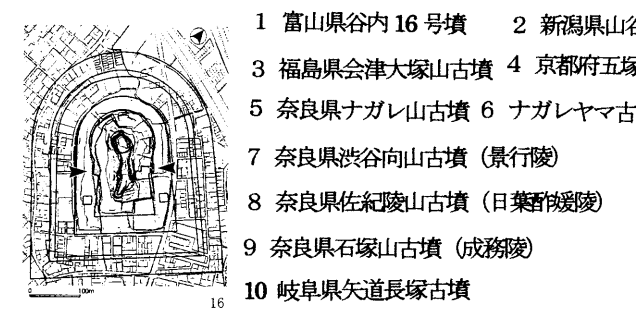
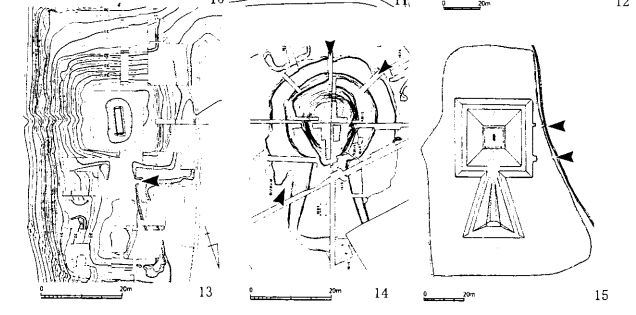
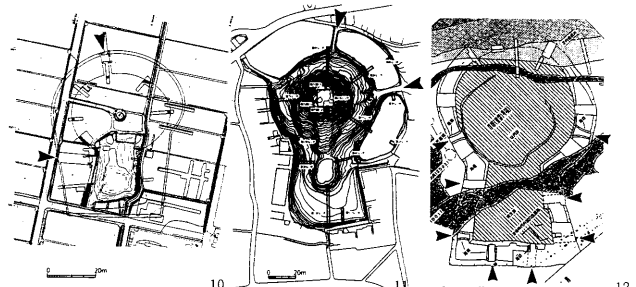


7・8 島根県造山3号墳

発掘された墓坑の出入口



11 大阪府久米田貝吹山古墳
15 群馬県元島名将軍塚古墳



12 福岡県拝塚古墳 13 石川県国分尼塚1号墳 14 福島県杵ヶ森古墳
16 大阪府津堂城山古墳

発掘された墳丘の出入口

1 富山県谷内16号墳 2 新潟県山谷古墳
3 福島県会津大塚山古墳 4 京都府五塚原古墳
5 奈良県ナガラ山古墳 6 ナガラヤマ古墳くびれ部

7 奈良県渋谷向山古墳 (景行陵)
8 奈良県佐紀陵山古墳 (日葉野媛陵)
9 奈良県石塚山古墳 (成務陵)

10 岐阜県矢道長塚古墳